

聖書:ルカの福音書5章1～16節

説教:わたしの心だ。きよくなれ

はじめに

イエスは、ご自分の故郷であるナザレのに帰られたとき、「預言者はだれも自分の郷里では歓迎されません」と語って、人々が期待するような奇蹟を一切行わなかったために、村から追い出されてしまいます。ところが次に向かった町カペナウムでは、多くの病人をいやし、悪霊を追い出したので、群衆はイエスを引き止めようとします。けれどもイエスはほかの町々にも神の国の福音を宣べ伝えなければならないからと言って、カペナウムから立ち去ります。ナザレとカペナウムを比べると実に対照的でしたが、よく見ると、いずれの場合もイエスは町から去って行くというところに共通点があります。この方には、十字架という大きな目的地があります。ですから一つところに留まることができず、ナザレからもカペナウムからも去らなければならなかった。それが前回までのあらすじです。

今日の箇所は、シモンがイエスに召し出され、「今から後、あなたは人間を捕るようになる」と語られる有名な場面です。それに続いてツアラウトに冒された人がいやされていくのですが、この二つのできごとには何の脈絡もないように見えます。でも、よく見るとここにも共通点がある。そのことを考えていきます。

1 漁師シモン・ペテロ

1) 湖に漕ぎ出す

1節にあるゲネサレ湖とはガリラヤ湖のことで、周りは小高い丘に囲まれていて実際に行ってみると湖の大きさも雰囲気も洞爺湖とよく似ています。いまも漁が盛んで、湖でとれた魚を食べると、あっさりした味だった記憶があります。

イエスは、大勢の群衆に神の国の福音を語るために、わざわざ湖に小舟を出しています。いまのように拡声器というものがなかった時代ですから、自分の声が大勢の人たちに聞こえるようにいろいろ工夫しなければなりません。地形のことはもちろんですが、風の向きも重要です。このときは、湖から陸に向けて風が吹いていたので、風上に立つために小舟を出したのではないかとされています。しかし、私はどうもそれだけではない。もっと別の理由があるのではないかと考えます。

2) 網を下ろして魚を捕りなさい

というのは、この場面はシモンのことを抜きにして考えられないからです。彼は、いつどこにどんな魚がいるかプロの漁師として全部知っています。ところが、この日は一匹も捕れず、陸に上がり網を繕い、家に帰ろうとしていた。そんなとき、イエスに声をかけられ、船を出すことになる。イエスが話し終えたので、てっきり陸に戻るものと思ったら、意外なことに、「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい」と言いだした。普通こんな時は、むっとしながら「ド素人の思いつきに付き合っていない」と言うでしょう。ところがシモンは、「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした」と言って、少し抵抗はするのですが、「でも、おことばですので、網を下ろしてみましよう」と言いながら、従うのです。

3) 私は罪深い人間ですから

そうしたら網が破れんばかりの大漁でした。一人では引き上げられないので、岸にいた仲間らに合図して助けに来てもらい、二艘の船でやっと引き上げた。シモンは驚いて、イエスの足元にひれ伏してこう言います。8節。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」

こうして、シモンとヤコブとヨハネ、彼らはすべてを捨ててイエスの最初の弟子となって従って行く。映画やドラマなら、実に絵になる場面ですが、シモンに何が起きたのか、少し細かく見ていきましょう。

シモンは、イエスが神の国の福音を語るのを一番近いところにいて聞き、何か心動かすものがあることを感じていたのではないか。でも、よくあるペテン師かもしれないと疑いも拭い去れない。どうしたらそれが確かめられるか。そんなことをシモンが考えていたら、イエスのほうから確かめる方法を示してくださった。「網を下ろして魚を捕りなさい。」もし魚が捕れなければペテン師で決まりです。ところが結果はご覧のとおりです。イエスは口先だけの人ではなく、この方が語ることは真理であることがわかった。そのことが分かったとき、シモンの目が開かれます。自分は自由だと思っていたけれど、実は人に嘘、偽りを語り、都合の悪いことをごまかしてきた。そんな罪と汚れが見えてきた。そしてイエスが語ったイザヤのことばを思い出します。「主はわたしに油をそそぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見え

ない人には目の開かれることを告げるために。」

(4章18節)

目が開かれて見えてきた罪に恐れおのきのながら、「主よ。私から離れてください。私は罪深い人間です」と告白します。主の圧倒されるようなきよさに触れて彼はひれ伏していきます。

2 ツアラアトに冒された人

1) 「お心一つで、私をきよくすることができます」

カペナウムを離れて向かった町には全身ツアラアトに冒された人がいて、汚れた者として町から追い出されて悲しんでいたとき、おそらく噂か何かでイエスのことを聞いたのでしょうか、イエスのところにやって来て、足元に触れ伏してこう言うのでした。12節。「主よ。お心一つで、私をきよくすることができます。」

2) きよくなる

イエスの答えはこうでした。13節。「イエスは手を伸ばして彼にさわり、『わたしの心だ。きよくなれ』と言われた。」

律法によれば、ツアラアトによって汚れた者に触れるなら、その人も汚れたこととなります。ですから人々は触れるどころか、近寄ろうともしません。もし遠くで見かけたなら、さっと別の角に入って会わないようにする。こんなふうに徹底的に差別されてきた。どこか、いまの新型コロナと似ています。マスクをしない人を見かけたら、何か思いませんか。これは他人ごとではありません。

ところがいまイエスの方から手を伸ばして触れる。イエスがもともと汚れていたというのなら、なんのこともありません。イエスはこう言ったのです。「わたしの心だ。きよくなれ。」

きよくなれ。口で言うのは簡単です。私でも言える。なぜなら、本当にきよいのかどうか誰も確かめようがないからです。イエスの場合はどうか。この人からツアラアトが消えました。この方がきよいことがはっきりと目でわかりました。

3) 願いがかなえられる

ツアラアトに冒されていた人は、自分がきよくなることをずっと願っていて、それがいまかなえられました。そのことに関して、ヨハネの福音書15章7節にこんなみことばがあります。「何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」(ヨハネの福音書15章7節)

ここで少し考えたい。何でも神に願え、そうすれば何でもかなえられるということなのか。もし、そうだというのなら、他の宗教でも同じことを言っていて、聖書もそれと同じ御利益宗教なのか。そうではありません。15章7節には、条件が書いてある。こうです。「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら。」

私は「秘訣」ということばが好きではありませんが、「願いがかなう秘訣は、イエスにとどまることだ。」そんな言い方ができるでしょう。ではイエスにとどまるとはどんなことか。聖書を読んで、毎週礼拝に出て、正しく生きることか。もしそうであるなら、パリサイ人も律法学者たちもそうしていた。そんな彼らをイエスは強く非難しました。ではどうすることなのか。

3 キリスト

1) イエスにとどまる

具体例を見ましょう。誰もいやすことができないと思われていたツアラアトがいやされました。ということは、先ほどのヨハネの福音書のみことばに照らすなら、この人はイエスにとどまっていたということになります。イエスにとどまりながら、欲しいものを求めたことになる。では、彼はこう言って願ったのか。「このツアラアトをいやしてください。」いいえ、そうは言わなかった。いや、言えなかった。なぜなら自分は、あまりにも汚れているので、そんなことをお願いする資格がないと思っていたから。だから口に出して願えません。でも心の中には、きよくされたいという願いがある。そんなギリギリの状態で、なんとか言えたのがこのことばでした。いやすのかどうか、それは自分で決めるのではなくて、イエスのお心にあること、イエスがお決めになること。そう思っている。それがこのことばになる。「主よ。お心一つで私をきよくすることがおできになります。」

イエスにとどまるとは、まさにこのようなことではないですか。私たちの祈りはどうだったろうかと振り返られます。願いがかなえられるかどうか、決めるのは自分であって、神は私たちの言うことを聞いてくれる存在。いつの間にか御利益の神様になっていなかったか。

そうならないように気をつけましょう、と言って済むのなら誰も苦労しない。イエスは私たちの弱さをよくご存じです。私たちが自然にイエスにとどまることができるようにしていただきます。いつ

たいどのようにしてか。そのことを最後に考えます。

2) きよい方が触れてくださる

今日登場する二人の人物、この二人の身に起きたことはまったく異なることでしたが、共通点がありました。まず、ツアラアトに冒された人。この人は、きよい心を持ったイエスがご自分の手を伸ばして、触れてくださったことでいやされました。この人がずっと願っていたことがかなえられていきました。

ではシモンはどうか。シモンは何を願っていたのでしょうか。ツアラアトに冒された人の願いは明らかでしたが、シモンについては何を願っていたのか書かれていません。でも、「自分は罪深い人間です」と告白し、すべてを捨ててイエスに従う決心までしたのですから、やはり彼も何かを願っていたのではないか。もし彼が、いつも仕事のことしか考えない、罪のことや霊的なことに関しては鈍感だったというのなら、こんなことは言わない。むしろ、「報酬を出すからもっと魚のとれる場所を教えてくれ。」すぐにビジネスの話しを始めるでしょう。そうではなくて、シモンが「自分は罪深い人間です」と言えたのは、こころの深いところでずっと罪のことで苦しんでいて、その解決をずっと願っていたからではないですか。この罪のことをなんとかしたい。

シモンに大きな変化が訪れる直前、イエスはなんと saying していたか、思いだしてください。「湖の深みに漕ぎ出しなさい。」最初この意味がわかりませんでした。でも、湖とはシモンのホームグラウンド、シモンの心のことだったと考えたらどうでしょう。イエスはシモンと一緒にのシモンの心の深みに漕ぎ出し、深くて暗いところにあった罪にご自分のきよい手を伸ばし触れてくださったのではないか。触れて終わりではない。網を上げます。そうするとたくさん魚が捕れた。シモンが目をそむけてきたものを恵みに変えてくださった瞬間ではないか。

私たちもおなじです。イエスがこうしてくれるとわかるので、私たちはイエスにとどまることができ。きよいイエスにとどまっていくとき、私たちの言えることはただ一つです。「私は罪深い人間です。」そのように告白する者とともに主は歩んでくださいます。